
傷薬

凜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷薬

【著者名】

NO3500

凜花

【あらすじ】

”デブ”この言葉に苦しめられてきた畠里沙。ある日、たまたま通りかかった旧商店街で、不思議な薬と出会う。それは、一粒でどんな”心の傷”も癒してくれる秘薬だという。本当にそんなすごい薬が存在するのだろうか？

(前書き)

世にも奇妙な物語りをイメージして書きました。学校へ提出した課題なので、まだまだ直しが必要ですが、とりあえず完結しています。

また、言われてしまつた。“デブ”この言葉に、何度も心を切り刻まれただろう。亜里沙は思う。“デブは自分のせいではない。一人っここということもあります。両親が亜里沙を必要以上に甘やかしたせいで、物心ついた頃にはもう既に肥満と呼ばれる体になつていたのだ。思春期になつて自分の体型が気になりだしたところで、急に運動をする体力もなければ本能として備わつてしまつた過剰な食欲を止めることもできなかつた。

当然、中学三年生になつた今も、亜里沙はまだデブのままだ。彼女自身それに慣れてしまつて、多少“痩せたい”という願望はあるものの、それはダイエットを決心するほどの強い意志には結びつきはしない。せいぜい、効くと噂のダイエット食品を購入するくらいだ。それも、中学生の安い小遣いではたまにしか買えない。

結局、痩せることのできない亜里沙は、今日もまたその体型のことでクラスメイトに心無い言葉を浴びせられたのだ。

昼休み、教室はからあげやハンバーグの匂いにつつまれて、あちこちで聞こえる談笑の声と共に和やかな雰囲気を放つてゐる。亜里沙も仲良しの友達と一緒に、楽しみにしていた弁当を開けた。

と、その時。それを見ていた男子が、「げえー渡辺の弁当でかすぎー！だからお前デブなんだよ」と大声をあげた。その言葉に、教室にいる男子がどつと沸き、数人が亜里沙のお弁当を覗きにやつてきた。その中には、凪平拓真の姿もあつた。少し前から彼に特別な気持ちを抱いていた亜里沙は、その姿を捉えた瞬間、恐ろしく時がスピードダウンしたのを感じた。

よりによつて彼の前で笑いものにされてしまうなんて！ 文字通り、穴があつたら入りたい気分だつた。目に熱いものが込み上げるのを必死で抑えながら、一緒に弁当を食べていた友達の助けもあつ

て、なんとかその場をしのいだ。午後の授業が始まる頃には、みんなさつきのことなんてすっかり忘れていたが、クスクスと押し殺した笑が聞こえる度に自分のことを笑っているのではないかと不安になつて、最悪な午後を過ごした。

そして、やつと六時間目が終わつた。明日の一限目の国語が数学に変わるという報告だけの短いホームルームが終わると、一日の中で一番楽しそうな雰囲気を放つて教室を飛び出した。

帰り道、亜里沙は、気分が沈んだままいつもの賑やかな商店街を通るのが憂鬱で、その裏通りにある旧商店街へ足を進めた。旧商店街と言つても、今はほとんどの店が潰れて、もはや昔の面影はほとんどない。カメラ屋の埃をかぶつたディスプレイに、そろそろアンティークと呼べるのではないか、というくらい旧型のカメラがぽつぽつと並べられている。値札なんかは劣化しすぎて、もう解読不可能だ。

店の奥でテレビの音がしているのに、店頭には誰も立つていなかつた。

その隣の店は服屋だらうか。でっかいブタのプリントがある、サイズも大きめのTシャツを見て、亜里沙は余計に気を悪くした。まるで、心まで“デブ”になつてしまつた気分だ。あのサイズのTシャツを着るような太つた人が、自分からブタのプリントを選ぶだろうか？ 考えれば考えるほど、デブを見下しているようで、心の体重は増える一方だ。

もういい、と、店を無視して通り過ぎようとした時、ある張り紙が彼女の目に留まつた。紙は黄ばんで、文字の色も薄く褪せてしまつて、その張り紙には、「どんな心の傷もたちまち治る特効薬、入荷しました」と書かれていた。その言葉は、今の亜里沙の心に強く訴えてきた。そして、彼女はまるで吸い寄せられるかのようにその店へ入つていった。

「いらっしゃい

亜里沙にとって、いつも古い店の店主はおばあさんやおじいさ

「あの、張り紙の薬つて、本当に心の傷を治せるんですか?」
「何か、心に傷を抱えてるの?」
「あ、はい……えつと」
「デブ“つて言われて傷ついてるんです、なんて恥ずかしくて言えない。口」もつた彼女に頷いて、女は後ろの棚から小瓶を取り出すと、少し声のトーンを落としてこう言った。

「効き目は抜群よ。ただし、副作用があるの」

「副作用?」

女につられて、亜里沙も声を低くする。

「この薬はね、心の傷を治す代わりに、その根本的原因を消滅してしまうの」

女の言つている意味がわからず、亜里沙はただ、目を瞬かせた。女は説明を続ける。

「例えば……そうね、あなたが頭が悪いと言われて傷ついたとするでしょう? それで、この薬を飲む。すると、あなたのお母さんがいきなり家庭教師を雇つて、あなたは嫌でも勉強をせざるを得なくなるの」

いきなり突拍子な話が出てきて、亜里沙は思わず「え?」と、聞き返してしまった。そんな彼女にはかまわず、女はなおも説明を続ける。

「そして、あなたは必然的に頭が良くなつて、頭が悪いと言つて傷つけられることはなくなる。これがこの薬の効能と、副作用」

「……ちょっと待つてください! そんなの、あり得ないです」

亜里沙はすっかり拍子抜けしてしまった。一瞬でも期待した自分がバカだった。心の傷が治る薬なんて、最初からあるわけがないのだ。

「信じられないのね

「……だって、薬を飲んだ亜里沙じゃなくて、お母さんが行動を起こすなんて、どう考へても」

「いいわ。じゃあ、試しに一粒あげる」

亜里沙の言葉を遮つてそつと、女は小さな紙に錠剤を一粒包んで、半ば強引に亜里沙の手に握らせた。

「え、あの！」

「心が傷ついて苦しいうときに、水で飲めばいいわ。騙されたと思つてやつてみなさい」

「でも……」

「傷つけられたんでしょう？　その傷を癒したくて、ここへ辿り着いたんじゃないの？」

女は諭すように亜里沙の片手を優しく握つた。亜里沙はゆっくり頷いて、その手をもう一方の手で握り返した。不思議な安心感に包まれて、やつぱつこの薬には不思議な力があるのではと思えた。

家に帰つた亜里沙は、いつもの半分くらいの時間でと夕飯とお風呂を済ませ、自分の部屋へ戻つた。興奮状態が治まらず、部屋の中を行つたり来たりしながら、さつきの出来事を思い返す。まだ信じられないけれど、どうせインチキだらうけれど、薬をこの手に握つたときの安心感が、本当にそんな奇跡が起つるのではないだろうか、という予感を亜里沙に与えていた。

すぐにでも飲みたい気分だつたが、家族が見ている前で何か変化が起つるのはなんとなく恥ずかしかつたので、みんなが寝静まるまで国語の宿題をすることにした。宿題といつても、明日授業でやるところを読むだけだ。いつもなら、やつたことにしてしまつたが、今日は何でもいいから時間を潰したかった。けれど、文字の羅列はそのまま頭の中を回り、どんなに意味を捉えようとしても無理だつた。その時、部屋のドアが唐突に開いた。

「あれ、亜里沙まだ起きてるの？　まあ、勉強してるなんて珍しい」

母親の声に、心臓がビクッと跳ねた。感覚的には、亜里沙が走り

高跳びで跳ぶよりも、ずっと高く跳んだ。

「わ！ び、びっくりした。別に、宿題してただけだよ」

「やう？ お母さんたちもう寝るからね」

「う、うん、おやすみー」

「おやすみー」

ドアが閉まるのを確認して、そっと胸を撫で下ろした。なんだか悪いことをしている気分だった。この間友達に借りた漫画に出てきた覚せい剤を持っている人も、似たような感情を持っていたのではないか。

やがて、家族みんなが寝静まつて、家に静寂が訪れた。亞里沙はみんなが起きないよう、ゆっくりとゆっくりと台所へ向かった。早く歩いてはいけないのに、興奮しすぎて自然と早足になってしまつた。けれど、誰も起きる気配はない。棚からコップを取り、水道を少しだけひねつて、ゆっくりと水を注いだ。そして、包み紙を開けて薬を取り出すと、そつと口に含んで水でゆっくり飲み込んだ。すぐには何か起ころのではないかと身構えたが、まったく変化は現れなかつた。

亞里沙はがつかりして、とぼとぼと自分の部屋へ戻った。ベッドに入り込み布団を頭までかぶつた。忘れないことがある時は、寝るのが一番だ。考えすぎて、これ以上デブになるのはごめんだ。目を閉じると、自然と睡魔が襲ってきた。

次の日、異常な寝苦しさに目を覚ました亞里沙は、自分の額に手をあててびっくりした。指先だけで触つてもわかるくらいの高熱だつた。もしかして、昨日の薬のせいだろ？ 不安が胸をよぎる。とりあえず台所へ起きていいくと、異変に気づいた母親が、あわてて駆け寄ってきた。

「大変、亞里沙ひどい熱よ。すぐに病院へ連れて行つてあげるから、とりあえず部屋で寝ときなさい」

「うん」

数分後、父親を送り出した母親は、亜里沙を支えながら近所の診療内科を訪れた。診療所なので細かい検査はできないが、恐らくインフルエンザだらうということだった。解熱剤だけ受け取り、すぐに家へ帰った。

風邪はひどく、解熱剤である程度熱は下がるもの、嘔吐を繰り返しご飯はほとんど喉を通りなかつた。そうして一週間が過ぎ、担当医に薦められた亜里沙立病院へ行つてみることになつた。そこで、血液検査からレントゲンまで様々な検査を受けたが、納得のいく結果は出ず、とりあえず入院ということになつた。

「はい、点滴しますねー」

そう言つ間に、看護師はさつと亜里沙の手を取つて、うつすらと注射の針が残る腕に突き刺した。注射嫌いの亜里沙も、さすがに入院二十日目ともなればいい加減痛みを感じなくなつていた。

亜里沙は、自分の体の変化に戸惑いを隠せずにいた。いつも使つているパジャマのズボンはすぐにずれてくるし、シャツの襟元からは肩が見えそくなつていて。長い間、病院の質素な食事でさえろくに食事も採れず、点滴で栄養を補つていたせいだろう。鏡で見る顔は、ほとんどむくみがとれて、スリムとまではいかないが標準体型に近づきつつある。最近は、毎日鏡を見るたび興奮状態になつた。もちろん、痩せたことに対してもだが、それ以上に例のクリの効果が現れたことに感動していたのだ。そつと、シャツの裾をめくつてみた。ハムの塊が作れそつたお腹は、ほんの少したるむ程度にまで削減されていた。

“デブ”って言われて傷ついた心を治すために、その根本的原因である“デブ”を消滅させようとしているのだ。周りの目を気にしつつも、亜里沙は顔がほころぶのを抑えることができなかつた。そんな彼女を、同じ部屋の中年太りのおばさんが、訝しげに見ていた。亜里沙は、心の中で「おデブさん、こっち見ないでよ」と毒づいてみた。自分が誰かに“デブ”という言葉を使える快感に、なんとも

いえない快感を覚えて、亜里沙は上機嫌でこの間母親に買つてきてもらつた雑誌を開いた。

入院から一ヶ月後。亜里沙はすっかり良くなつて、ついに退院できることになつた。

お世話になつた先生に挨拶を済ませた亜里沙は、暇つぶしに読んでいたマンガや雑誌、それから着替えたんかを抱えて、父親の運転する車に乗り込んだ。明日から学校へ行ける。そう思うと、わくわくしていく。いつもなら、今日は誰に“デブ”と言われるのだろう、また彼の前で笑われるかもしれない、そう考えるだけで胃がキリキリと痛んだものだ。

学校へ行くと、心配していた友達が駆け寄つてきて、みんな口々に「え、嘘、亜里沙？」だの「すごい痩せたね！」などとはやし立てた。その言葉の節々に、嫉妬心が混ざつているのを感じて、亜里沙は余計に鼻高々だつた。両親とも綺麗な顔立ちをしているおかげで、肉を削ぎ落とした彼女の顔は、“美人”と呼ぶにふさわしいものになつていた。女子の歓声にこつちを振り向いた男子も、生まれ変わつた亜里沙を見て目を丸くしていた。当然ながら、誰も彼女に“デブ”と言うものはいなかつた。

授業中、四方八方から感じる今までとは違う視線を浴びながら、亜里沙は、今日もう一度あの薬屋へ行こうと考えていた。あんなに素晴らしい薬をもらつたお礼を言わなければ。それと、是非あの薬を売つてもらわないと。こんな体験をしてしまつたら、もう薬なしでは生きていけないと。それは、麻薬による依存症にも似た感覚だつた。ふと斜め後ろを見ると、皿平と目が合つた。けれど、彼はつまらなそうな顔をしてそっぽを向いてしまつた。

授業が終わると、友達の誘いを断つて、あの商店街へ向かつた。そつきの彼の顔が頭に浮かんで、少し悲しくなつた。

「こなんにちは」

「あら……いらっしゃい。久しぶりね」

中へ入ると、相変わらず爽やかな笑顔で迎えてくれた。

「お久しぶりです。あの、この間はどうも」

「その様子だと、効いたみたいね？」

何でもお見通しなのよ、とでも言いたげな笑みを浮かべて、女はあの小瓶を取り出した。

「これ、買いに来たんでしょう」

「はい、何円ですか？」

「三粒入りで三千円。この間一粒あげたから、残り二粒よ」

「それ、ください」

一ヶ月分の小遣いを使い果たすのはきついけれど、それ以上に亜里沙はもうこの薬に魅せられてしまっていた。

「どうしても必要な時にだけ、よく考えて使ってね」

女の声に深く頷いて、小瓶をカバンに仕舞つて亜里沙は走り出した。嬉しさが体の中だけで留まりきらなかつたのだ。風を切つて走つていると、今まで以上に体の軽さを感じて、このまま飛べそうな気さえした。

やがて中学を卒業し高校生になつた亜里沙は、未だ凪平のことを思い続けていた。高校では彼と離れてしまい、会えない日々が続く。恋とはまさに煩うもので、亜里沙は胸の痛みに耐え続ける日々を送つていた。

そして、ついに例の薬に手を出した。この辛い恋煩いを治したい。その思いよりは、この胸の痛みを利用して凪平に会えないかという企みの方が勝つていた。

再開は突然訪れた。前日に飲んだ薬が睡眠薬の効果を發揮したのか、亜里沙は珍しく寝坊をしてしまつた。亜里沙はいつもより一本遅い電車に乗つた。

「あれ、もしかして渡辺？」

その声を聞いた瞬間、亜里沙の胸の中を何か甘いものが駆け巡った。振り返ると、そこに凪平拓真がいた。

「な、凪平！」

「やっぱり、渡辺？　久しぶりだな」

「う、うん、久しぶり。いつもこの電車に乗るの？」

変に高い声が出るのを気にしながら、頬が赤くなつていなか心配しながら、それとなく探りを入れてみた。

「うん、大体、いつもこの車両のこの時間だな。渡辺は？」

「あ、えーっと、亜里沙は……今日からちょっと学校へ行く時間をずらしたの」

心臓の温度は、沸騰寸前まできていた。数秒で必死に搾り出した嘘は、当然、明日から彼と同じ電車に乗るためのものだつた。「今度から、毎日会うかもね」と、なるべく自然に言いながら、亜里沙はちらつと携帯電話で時間をチェックした。

「そつかー。じゃあ、見かけたら声かけてな。俺もかけるし」

「うん、もちろん！」

「あ、俺ここで降りるわ。またなー」

「うん、またね」

次の駅で亜里沙も電車を降りた。そして、自分が乗つていた車両を確認して、学校へと向かつた。

それ以来、亜里沙は毎日凪平と同じ電車に乗り、彼が下車するまで色々な話をした。彼が今通つている高校のこと、サッカー部のキヤブテンをしていること、地元のコンビニでバイトをしていること、そのバイト先の店長がバー・コードハゲだということ、成績がクラストップになつたことなど。彼のことを一つ知るたびに、恋心も一つ募つていつた。

亜里沙も、学校のことや地元の駅前のカフェでバイトをしていること、それから友達のことなんかを話したけれど、彼の話に夢中でほとんど聞き入っていた。中学校の時の想いが蓄積しているせい

が、今までのどんな恋愛よりも夢中になつていた。授業中も彼のことをばかり考え、勝手な妄想を膨らませ、時々、机に突つ伏して彼とデートをしたりした。

そのうち、お互に携帯番号とアドレスを交換して、授業中にこつそりメールをするようになつた。一人ともバイトがある日は、待ち合わせをして一緒に帰るようになつた。会えない日は夜中に長電話。その頃にはお互い、『拓真』『亜里沙』と呼び合つよになつていた。

ある日、いつものように彼のコンビニへ寄つた帰り、拓真は真剣な声で「ちょっと話があるんだけど、いい？」と、亜里沙を近くの公園へ誘つた。街灯真下にあるベンチに腰掛けで辺りを見回すと、さすがに真冬の夜に公園へ出かける人はいないようで、全く人気がなかつた。真つ暗な闇の中に、一人だけがぼんやりと浮かび上がつた。

「話つて？」

少し白々しい気もしたが、他に言葉が見つからなかつた。何を言われるのかわかつていても、緊張で心臓が高鳴り始めた。沈黙が続く中、自分の心音だけが音を発していた。やがて、沈黙を破るかのように冷たい風が吹き抜けて、思わず亜里沙が「寒い！」と彼に身を寄せたのを皮切りに、やつと彼が話し始めた。が、それは想像していた話ではなかつた。

「中学校の時も、覚えてる？」

「中学校？ うん、まあ」

“デブ”だったという過去が封印されている中学校の話は、あまり亜里沙にとつて気持ちのいいものではない。

「亜里沙さ、その……結構太つてたじやん？」

「……」

拓真の口から“デブ”という言葉を聞いて、少し目眩がした。彼の口からは絶対に聞きたくないと思っていた言葉を今さら聞いてし

まうなんて。亜里沙は「これ以上聞きたくない」と、枯れた声で咳いて席を立つた。けれど、すぐに「違うんだ、聞いてくれ!」と、彼の手に引き止められてしまった。

「違う? 何が違うの? そんなことを言つたために私をここに呼んだの!」

強制的に聞きたくないことを聞かされる不快感に、亜里沙は声を荒げた。けれど、彼は次の瞬間驚くような言葉を放つた。

「俺は、あの時から……亜里沙のことが好きだつたんだ」

「え?」

拓真は、亜里沙に考える隙を『え? まくし立てた。

「その、俺、デブ専つてやつで……」

「は?」

「だから、亜里沙のこと好きだけど、でも付き合えない! 最初は、それでもつて思つたんだ。でも、やつぱりつしても……『めん』

「ちょ、ちょっと待つてよ」

「期待させるよつな」として『めん!』

「え、嘘でしょ!」

亜里沙の声は、彼の去り行く背中を虚しくかすつただけだつた。彼女の中には、ハテナが残された。ショックや怒りを感じる前に、とにかく意味がわからなかつた。

やつと事の重大さに気づいたのは次の日。一限目の授業中に、多大な喪失感が亜里沙を襲つた。まず、授業中に考えることがなくなつてしまつた。妄想する相手がいなくなり、授業中に亜里沙の携帯を鳴らすメールもなくなつた。もちろん、友達からはたまに来るが、もともとそんなに友達が多いわけでもなく、時間がぽつかりと空いてしまつたのだ。

お互に両想いなのに、彼は自分の前から立ち去つてしまつた。そつ、それが一番辛かつた。自分たちは実際、惹かれあつていたのだ。そして、今もきっと、好き同士なのだ。それなのに、自分が“デブ”でないといつだけで、うまくいかなくなつてしまつたのだ。

それさえ除けば、三年越しのロマンティックな恋愛だったのというのに。

思えばあのとき、あの自分が痩せたときの彼のつまらなそうな態度は、そういうことだったのだろう。デブ専。世の中にそんな種類の人間がいることは知っていたが、よりによつて彼がそعدなんて。裏切られた気分だった。

制服のポケットに入れると、指が小瓶に触れた。中には、最後の一粒が入つていて。この薬を使うのは、今しかないと思った。今回は、どんな効果が現れるんだろう？ 今回の原因は、彼の“デブ専”だ。それは、間違いない。ということは、何らかの方法でそれを直すことができるはずだ。

一限目が終わると、鞄の中からペットボトル入りの水を取り出し、薬を一気に飲み込んだ。少しでも早く彼を手に入れたい。早く彼に会いたい。そんな想いが、亜里沙を急かした。そして、早く効果が現れないと、毎日期待しながら学校へ行つては、何も起こらないことに失望していた。

そのまま数週間が過ぎたが、まだ何も変化はなかつた。その日、テレビで薬を飲みすぎると抗体ができる効きにくくなると知つて、追加の薬を買うためにあの商店街へ向かつた。ところが、店は既に廃屋状態で、割れた鏡が床に散乱していた。その不吉な光景に、亜里沙は嫌な予感がした。まさか……自分を悲しませた原因である彼が、彼自身が消滅してしまうのでは？ 急に恐くなつて、亜里沙は急いで彼に電話をかけた。しかし、その電話は彼に繋がることはなかつた。

彼は、消えてしまったんだ。私の傷を癒すために？ 「冗談じゃない。彼がいなくなつたところで、私の想いは決して消えはしないのだから。そう、亜里沙はまさに絶望の淵へと立たされていた。

そして、自暴自棄になつた彼女はお菓子を食つ漁り、その度に痩せなくてはとダイエットするが、すぐにまた精神不安定となりまた過食を繰り返した。彼女の体は、太つたり痩せたりを往復し、一年後

には中学校のときの体型へ戻ってしまった。

そこで亜里沙は気づいた。そうか、私たちが付き合えなかつたのは私が“デブ”じゃなかつたから。だから、この薬で私は太つたんだ。すごく遠回りをしてしまつたけれど、やつと彼に愛されることができるんだ！ 亜里沙は嬉しくなり、久しぶりに外に出ることにした。そして、偶然とはすごいもので、以前バイトをしていたカフェで彼と再会を果たしたのだ。

懐かしい笑顔に、亜里沙は熱い感情が沸くのを感じた。一年たつた今でも、彼への想いがあの時まま残つてゐる証拠だつた。

「拓真！ ねえ、久しぶり！ 覚えてる？」

「え……」

「ほら、亜里沙だよ！ 渡辺亜里沙！」

「おおー、亜里沙？ うわー久しぶり！」

それと同時に、拓真の顔が懐かしそうに笑つた。その笑顔が昔のままだつたので、亜里沙はあの頃に戻つたよつた、トキメキが戻つてきた。

「よかつた、覚えてくれてて。元気だつた？」

「うん、元気だよ。そつちは？ その……あの時はごめん。俺どう

かしてたよ」

その言葉に、亜里沙の鼓動は加速する。公園でベンチに腰掛けて待つていた言葉を、やつと今聞くことができるのだろう。

「ううん、いいの。人の好みはいろいろだしね」

「ありがとうな。それにしても……お前太つたなー。あの頃の俺だつたら、もうタイプだつたよ、マジ」

「……え、あの時？」

「あ、そうそう。俺、彼女できたんだ」

「え、彼女？」

「うん、今ここで待つ……お、来た来た、美咲こっち」

「遅くなつてごめんねー。あれ、この人誰？」

「ああ、紹介するよ。中学校からの知り合いで、渡辺」

「彼女の美咲です。よろしく」

そう言って、彼女は手を差し出した。そこから白い半そでのブラウスの袖口へと伸びる腕は、白く、折れそつなくらい細かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0350c/>

傷薬

2010年10月8日15時59分発行